

スーパーHISLEND-Hの構造性能*

川崎製鉄技報
24 (1992) 3, 172-176

Structural Behaviors of Super HISLEND-H

要旨

スーパーHISLEND-Hの製造実績に基づく機械的性質のばらつきを考慮したH形鋼の面内弾塑性挙動解析より、スーパーHISLE



Fig. 2 Loading condition

対象も限られているため、本結果から直ちにスーパー・ハイ・スレンド H が十分な塑性変形能力を有しているとは言えないが、実際に使用される軸力比 0.4 以下の領域では塑性変形倍率は 8 以上となっており、実用上問題はないと考えられる。

3. 鉛直スチフ七形式 SRC 柱-S けり接合部の力学的挙動

とおりであり、軸力比 (p) は 0, 0.2, 0.4 および 0.6 の 4 種類とした。

解析では、まず、各軸力比に対するモーメント-曲率関係を求め

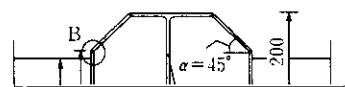
的挙動

3.1 研究目的

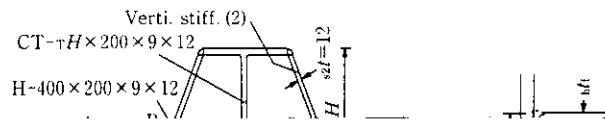
モーメントが漸増すると仮定する。なお、残留応力は無視する。
柱のモーメント-曲率関係を用いて CDC 法 (column defl.

部の補強には通常水平スチフナが用いられる。しかし、水平スチフ

(a) B-series

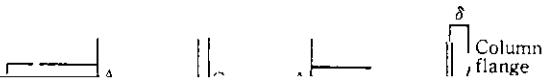


(b) C-series



(1) 崩壊機構 (T)

鉛直スチフナの降伏形が引張降伏形の場合に適用する。この
場合、崩壊機構は森田らの示すものと同一であり、接合部耐力



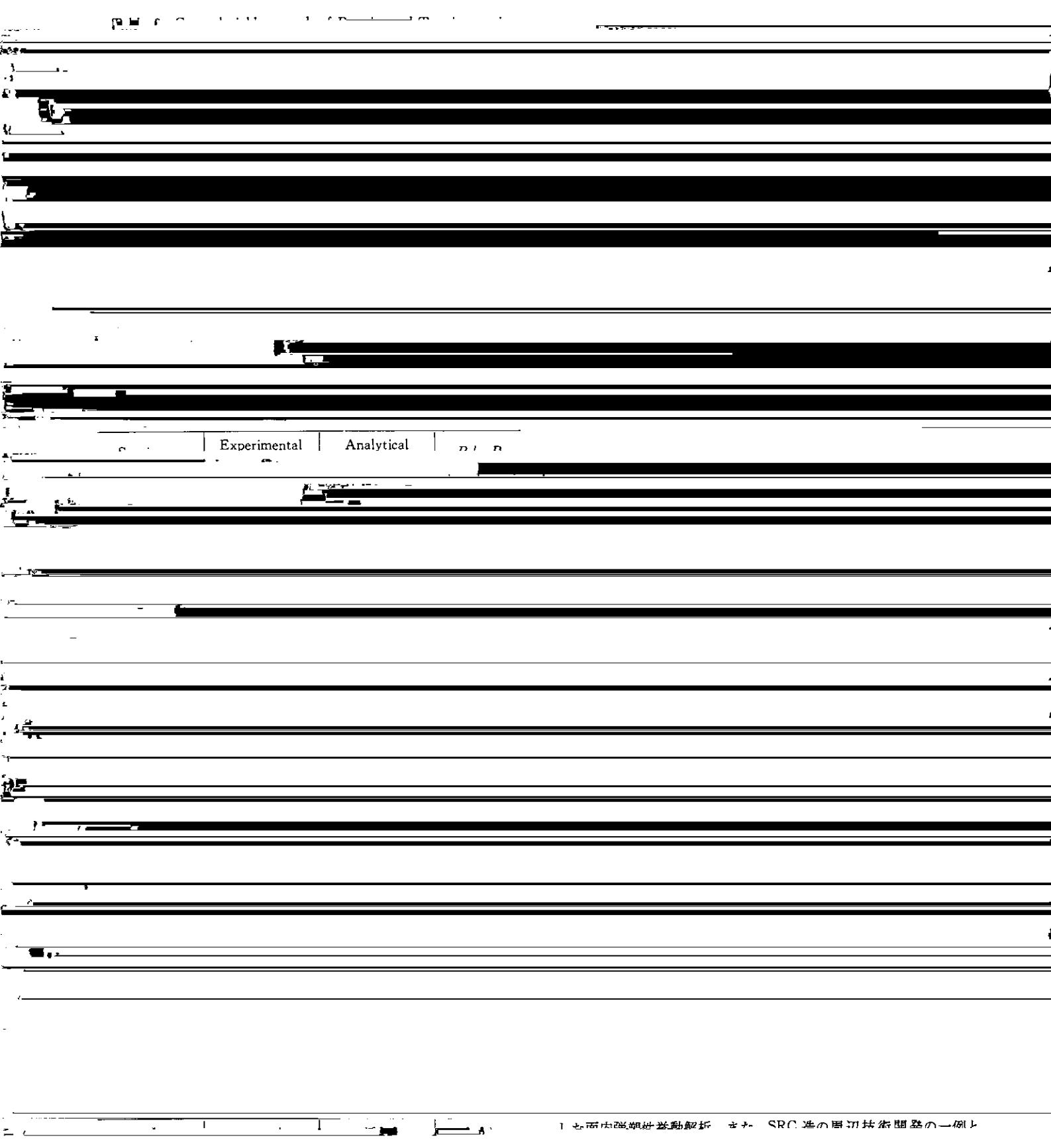


図 7-1 改良骨組の動的試験結果
No. 1 の荷重-変形曲線